深夜のレニングラード駅では列車の出発まで1時間半も待たねばならなかった。上野駅の改札口前の屋内広場のゆうに2倍もあろうかと思われる広い方形のアーケードは，乳白色の石造りで，モダンで立派で，螢光灯に輝いてまばゆい程である。正面に大きなレーニンの胸像があるのが唯一のお定まりの装飾である。アーケードの終る所は，屋根のない暗いホームに通ずる入り口になっている。その付近の壁側の石の棚には，疲れ切った表情の家族連れが沢山，居眠りをしたり，横になってねむりこんだりしている。この深夜の駅の光景は，どこの国の始発駅，終着駅にも共通であり，人間模様曼陀羅の図柄である。商店や物売りなど殆んどみられないのは，日本でのはでばでした広告にうんざりしている者としては，清潔ですっきりした感じを受けるが，物足りなさと不便さも否めない。深夜の駅頭には，片隅で固パンのようなロシア菓子が少しばかり売られているだけであった。

立ったまゝ話すのにも疲れた頃，プラットホーム横に停っているバスの中に，待合室代りにと案内され，暗い椅子に坐りこんだ。折悪しく雨がそぼ降り始め，とてもはしゃぎ華やいだ旅立ちとは縁の遠いものとなった。旅先の思い知れぬ，漆黒の闇が往く手に立ちはだかり，心もとないやる瀬ない印象で，ロシア文学に画かれて来た背景が，ひしひしと感じられた次第である。

「雑　　感」

井内　昇

過ぎてしまえば1年も短く感じるものだが，それにしてもこの1年間は短かったと思う。大学での春夏秋冬をひとわたり経験しての卒直な感想は，「大学とは忙しい所だ」ということである。と言っても，大学とは暇な所と思って来たわけではない。授業等の拘束時間だけでいえば，役所より遙かに短いことはいうまでもないが，それにも拘らず「忙しい」と感じるのは，大学での仕事はむしろ拘束時間以外にあり，それが役所の勤務時間のような明確な始めと終りを持たないから，何時も仕事のことが頭を離れなかったためであろう。大学の仕事の単位が原則として個人で，その範囲は時間も含め自分で決めなければならないとすれば，そのメリットを生かす方向で早く順応する他はないだろう。今はまだ授業以外の諸役は殆ど引受けていないが，今後はそのような仕事もふえるものと覚悟している。

この1年間で，授業を介して一応1年から大学院2年までの全学生諸君と接することができたが，予て聞いていたようによく勉強する（学年別に若干差があるのも面白い）のには感心する。また，学生諸君が礼儀正しく素直で明朗なこともこの大学の特色なのだろう。

お茶大は他大学に比べれば極めて小規模な大学であるが，市古学長も指摘されるように，それは現在の日本の大学事情の中では得難い利点である。大学のマンモス化によるマイナスが問題になっている現在，この良さは今後も失いたくないものだ。大学とは本来教師と学生，学生相互の全人格的な交流を中心とする教育の場であり，そのためには小規模であることが必要なのだが，その反面，小規模であることは交流の幅を狭くするマイナスにもつながる。大学内で学部，学科の枠をもつと緩くして全学的な交流の機会をひろげることは出来ないだろうか。

この少人数教育の良さに加え，お茶大の教育環境を支えるもうひとつの要因は，キャンパスが広いことであろう。都心にしてはかなり恵まれた敷地のおかげで，学園内では常に静かな雰囲気が保たれている。しかし，このように広い敷地に恵まれながら，その土地利用は必ずしも有効とは言えないように思う。附属校がかなりの敷地を占めていることは歴史的な経緯もあるから一応措くとしても，大学関係の各建物の配置は余り合理的とは思えないし，かなりの土地が無駄になっているのではないだろうか。これまでは無駄も一種のゆとりとして許される余裕があったろうが，もうその段階は過ぎたように思う。堅固な建物は一旦建てられると簡単に撤去できないから，今後の校舎建設は長期的な土地利用計画の上に行なわれることが望まれる。例えば，図書館西側の空地は建築用地に予定されているようだが，むしろ学生の憩いの庭園として整備したい場所だ。今からそのような広場を作るとしたらこの場所しか無いであろう。

ともあれ，このような環境の中で，前・後期とも先輩各先生方とほゞ同じ時間数の講義，演習を受け持ち，昨秋は長野県白馬村での式先生との合同巡検（３年）に参加した。幸い好天に恵まれ，かなり盛沢山の課題を用意したにも拘らず全学生が意欲的に取り組み，その成果が充実したレポートとなって提出されたこと，さらに何人かの学生のレポートの中に，「白馬村巡検で始めて地理学の難かしさと面白さがわかったように思う」という感想を見つけたことなどの中に，地理学教師としてのさゝやかな喜びを見出している。（１月１５日記）

かくされているデータ

内藤博夫

何かを研究しようとする場合，私たちはデータを収集し，それに基いて論理を組立てていく。その際，既存のデータが入手できなければ自力でそれを作り出す努力をする。実態調査や実験を行うのはそのためである。しかし自力でデータを作ることは，時間・労力・費用の制約があるから限界をもっている。例えば全国的なデータが必要となった場合は，それを個人の力で作り出すことは事実上不可能である。そこでしばしば利用されるのが国勢調査など，全国をカバーしている官庁統計である。しかし官庁統計に限らず，既成の統計書はそれぞれ独自の方針にもとづいて編集されているから，個々の研究者の必要を常にみたしてくれるわけではない。とりわけ私たちになじみの深い地域統計は地域の数が多くなればなるほど統計書の収容力との関係で項目の数は減少する傾向がある。そのため地域統計で利用できる範囲は全国統計よりも狭められてくる。言いかえれば，地域統計の場合，調査された結果の少からぬ部分がかくされてしまうのである。考えてみればこれは大変残念なことである。

この他に秘とく数字の問題がある。工業統計表や商業統計表を利用したことのある人ならばxと記されている秘とく数字の処理に悩まされたことが1度や2度はあるだろう。これは事業所数が1ないし2しかない場合に，企業の秘密を守るためにとられた措置である。統計調査の公平さを維持するために必要な措置であるとはいえ，これ，また調査された結果が日の目を見ないという意味で残念なことである。金銭に関する統計だけをかくすのであればまだしも，現行の官庁統計では公表されるのは